

平成21年5月25日

水産庁

独立行政法人 水産総合研究センター

平成21年度日本海マアジ長期漁況予報

—別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果—

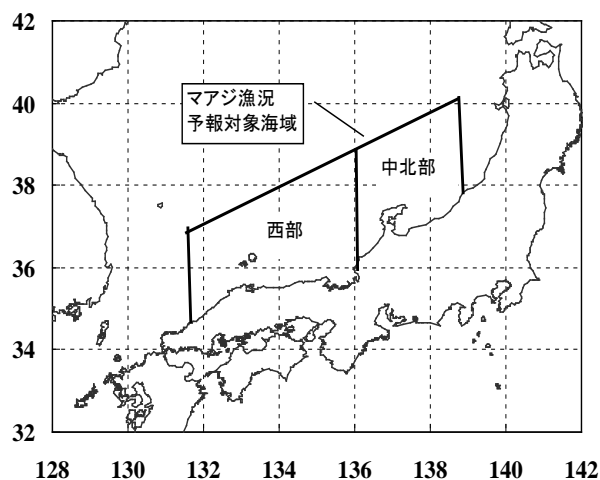
今後の見通し（2009年5月～9月）のポイント

対象魚種：マアジ
対象海域：日本海
対象漁業：定置網、まき網

来遊量

日本海西部と中北部ともに
前年を上回る。

※「前年」は2008（平成20）年5月～9月
を示す。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：今井、和田、染川

電話：03-3502-8111（内線 6800）、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

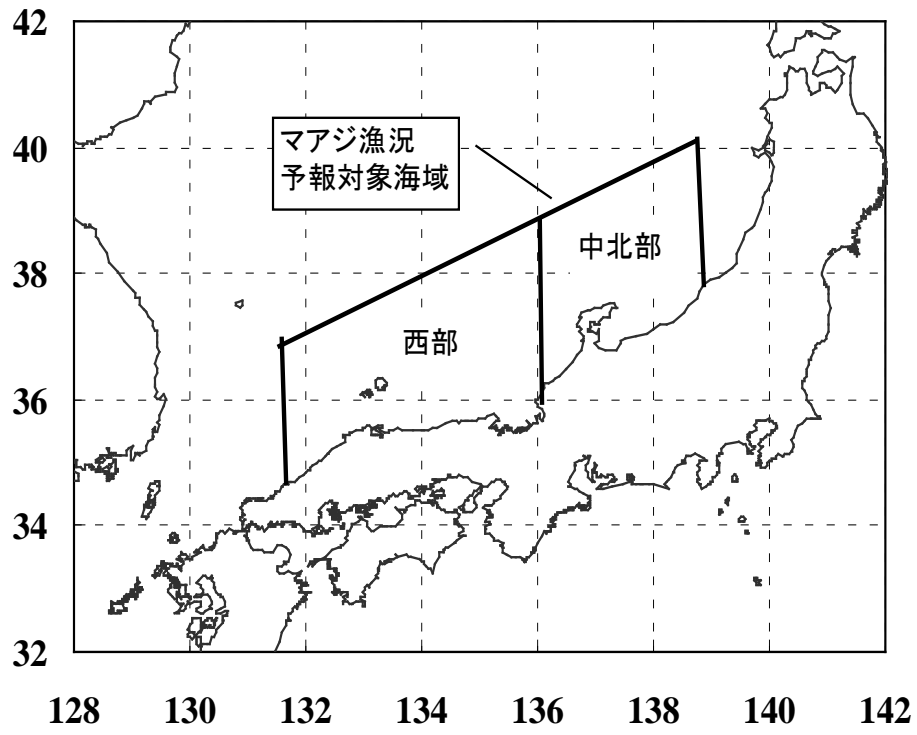
独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>



予報対象海域

平成 21 年度日本海マアジ長期漁況予報

今後の見通し（2009 年 5 月～9 月）

対象海域：島根県～新潟県

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0 歳魚（2009 年級群（2009 年生まれ））、1 歳魚（2008 年級群）、
2 歳魚（2007 年級群）

- (1) 日本海西部海域では 1 歳魚が主体で、夏以降は 0 歳魚の割合が増加し、全体の来遊量は前年を上回る。
- (2) 中北部海域でも 1 歳魚が中心で、前年以上の来遊が見られる。

※「前年」は 2008（平成 20）年 5 月～9 月を示す。また、「体長」は尾叉長で測定した。

漁況の経過（2008 年 4 月～2009 年 3 月）及び今後の見通しについての説明

1. 資源状態

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系資源の一部であり、その動向は東シナ海域の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北域、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0 歳魚として対馬暖流に沿って山陰、中部海域から能登半島以北に分布を広げる。越年して 1 歳魚となると、春季に九州西・北域から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その他に 1 歳以上に成長したものが日本海での越冬傾向が強くなり、やがて地付き群として日本海で産卵し、中北部海域で漁場を形成するものと思われる。

対馬暖流系の資源量は 1970 年代後半には低水準にあったが、1980～1990 年代前半に増加し、1993～1998 年には高水準を示した。1999～2002 年に資源量は減少したが、2003～2004 年に資源量は高水準に回復した。2005 年以降の資源量は高水準より減少していると推定されている。高水準期（1993～1998 年）には対馬暖流域全体で約 20 万トンの漁獲を維持していたが、1999～2002 年は 13～16 万トンに減少した。2003 年から漁獲量は再び増加し、2004 年には約 19 万トンであったが、2007 年には 12 万トンに減少した。日本海における島根県～新潟県の主要港の水揚げ量は 1999 年の 63,000 トンから 2002 年の 40,000 トンに減少したが、2003 年以降増加傾向を示し、2004 年には 68,000 トンを記録

した。しかし、2005年以降2007年を除けば40,000トン前後に止まっている。2008年の漁獲量は約42,000トンで、前年および平年を大きく下回った（図1）。

2. 漁況の経過

2008年4月～2009年3月における島根県～新潟県の主要港の水揚げ量は39,000トン（各府県の速報値等の集計による）であり、過去5か年（2003～2007）平均値（53,000トン）及び前年同期（56,000トン）を大きく下回った。日本海のマアジの漁獲量はまき網と定置網によるものがほとんどであり、平年、定置網の占める割合が5～7月の3か月以外概ね20%以下で、まき網によるものが全漁獲量に大きく影響している。2008年4月以降のまき網の漁獲量は7月と8月の2か月を除けば平年を大きく下回り、まき網の漁況は全般的に低調であった。定置網の漁況もまき網とほぼ同様な傾向を示し、ほとんどの月で平年を下回り、低調に推移した（図2）。地域別では、定置網が中心の中北部の漁況は6～8月に好調の前年および平年を下回ったものの、秋期以降は概ね平年並みに推移した。まき網が中心の西部の漁況が総じて低調だったため、総漁獲量は10月と1月以外は前年を大きく下回り全般的に低調に推移した（図3）。

日本海西部のまき網では、春から夏にかけて体長10cm台後半の1歳魚（2007年級）の占める割合が大きく、初夏以降体長10cm以下の0歳魚（2008年級）の加入が見られ、秋期以降の0歳魚の漁獲は堅調であった。中北部の定置網では、夏から体長10cm以下の0歳魚の加入が見られ、秋期以降の漁獲の大部分を占めた。また、体長15～20cmの1歳魚および20cmを超える2歳魚以上の漁獲も見られたが、漁獲の主体は15cm以下の0歳魚であった（図4）。

3. 今後の見通しの説明

今後の日本海西部における漁獲の主体は1歳魚（2008年級）で、初夏以降0歳魚（2009年級）の割合が高くなると思われる。昨年資源評価の結果及び漁況の推移から2006年級と2007年級の加入水準が低かったと見られている。5～6月に日本海西部海域で行ったトロール調査によるマアジ稚魚の採集数と水温分布から算出した2008年級の加入量指数は前年より大きく増加したことおよび秋におけるまき網の0歳魚の漁況は堅調であったことから、1歳魚は低調の前年を上回ると見積もられる。また2009年級（0歳魚）につ

いては予測が難しく今後の海況によって加入量が大きく変動する可能性もあるが、2008年級と同程度と考えると、日本海西部海域から夏以降の中北部海域では、0歳魚と2歳魚は前年並み、1歳魚は前年を上回り、全体の来遊量は前年を上回ると考えられる。

日本海中北部については、石川県および新潟県による体長測定の結果では、定置網を中心に2008年初夏以降0歳魚（2008級）の漁獲に占める割合が高く、2008年級群の加入が順調であったことから、1歳魚を中心にした相応の来遊が予想され、今後の漁況は低調であった前年を上回ると思われる。

日本海に来遊するマアジは、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見られる。期間中6月までの対馬暖流域の50m深水温はやや高めで経過するとされ（平成21年度第1回日本海海況予報、日本海区水産研究所）、マアジ漁況への環境面からの影響は小さいと考えられる。

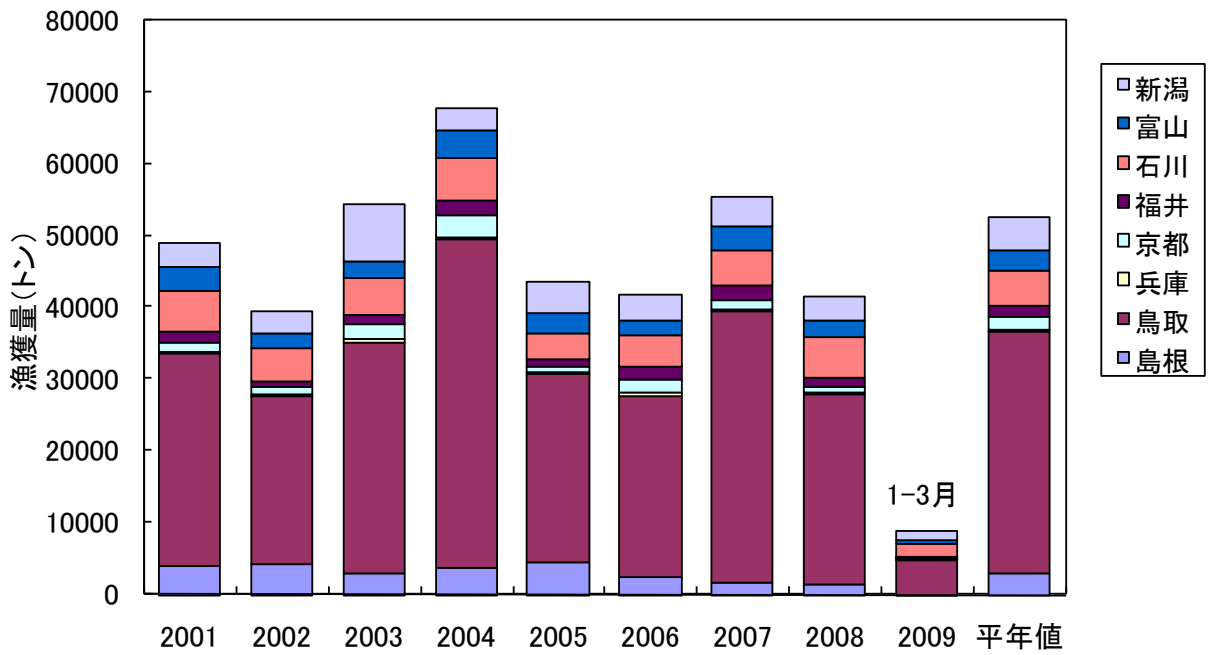


図1 日本海主要港（島根県～新潟県）の漁獲量の推移（2009年は1月～3月）。
平年値は過去5か年（2003年～2007年）の平均値を示す。

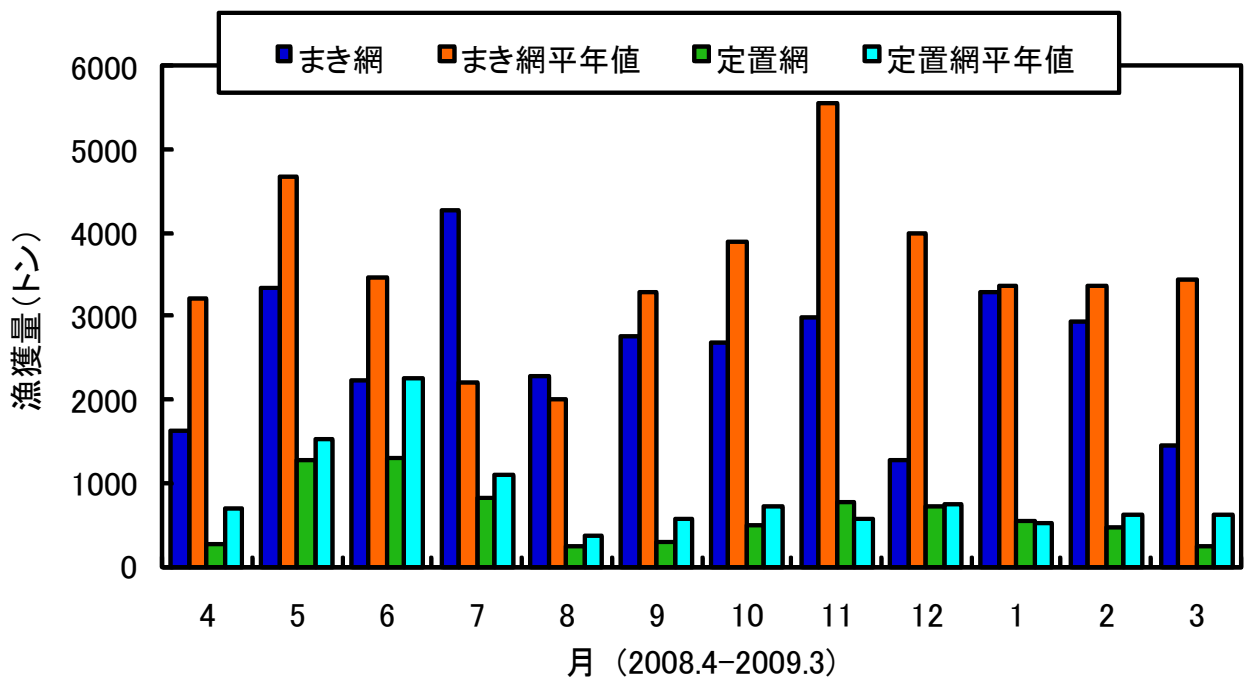


図2 漁業種類別漁獲量の経月変化（2008年4月～2009年3月）。
平年値は過去5か年（2003年～2007年）の平均値を示す。

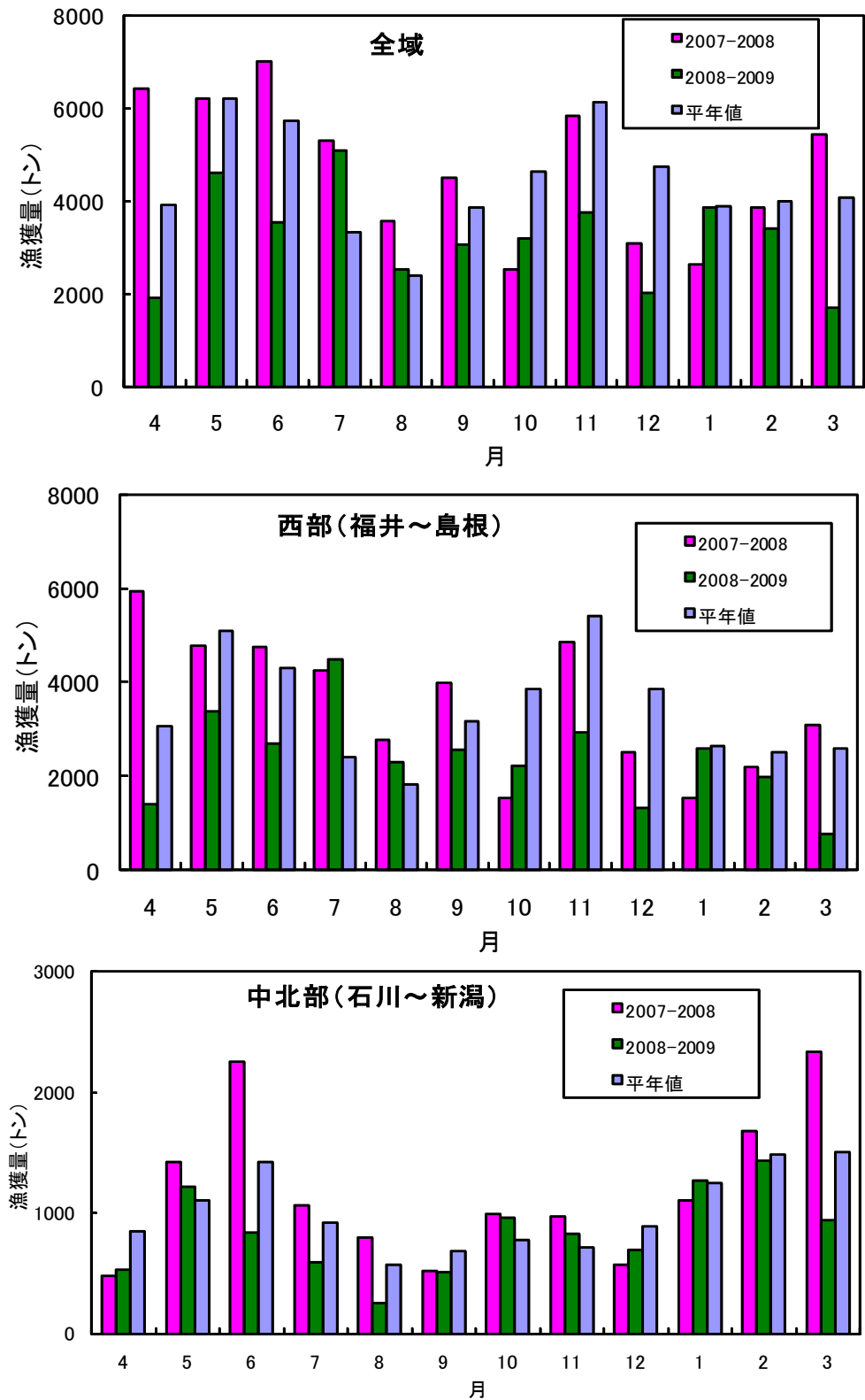


図3 日本海主要港への水揚げの経月変化

平年値は過去5か年(2003年~2007年)の平均値を示す。

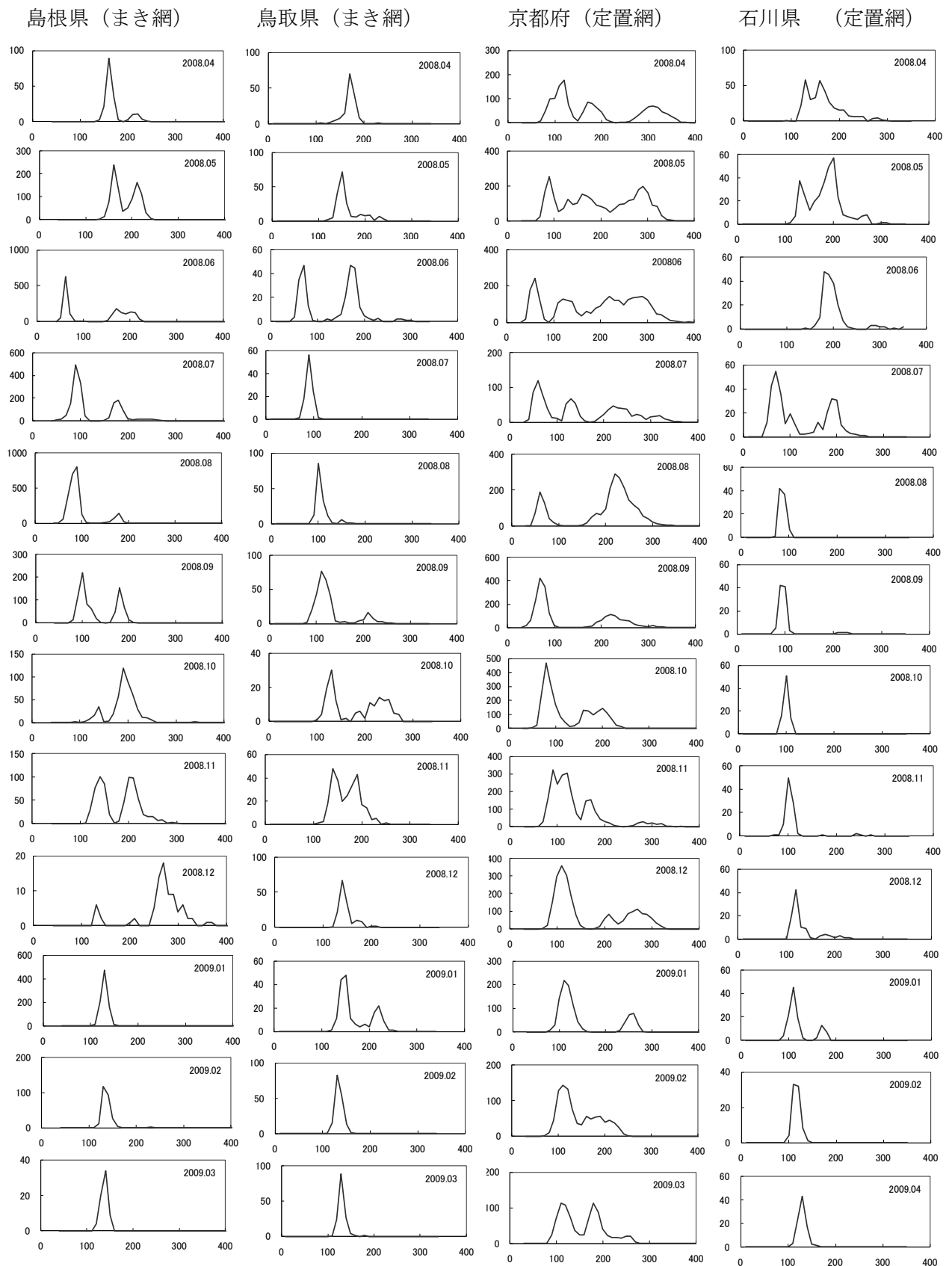


図4 体長組成の経月変化（2008年4月～2009年3月、各県調べ、
石川県は2009年4月まで）（横軸体長 mm、縦軸個体数）。

参 画 機 関

島根県水産技術センター	山形県水産試験場
鳥取県水産試験場	秋田県農林水産技術センター 水産振興センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所
京都府農林水産技術センター 海洋センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
石川県水産総合センター	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所 日本海区水産研究所
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	
新潟県水産海洋研究所	